

(社会科・生活科)

「見方・考え方を働かせて進んで取り組もうとする児童の育成」

大阪市立弁天小学校

1. 研究主題設定の理由

本校では、めざす子ども像を「意欲的に課題を追究できる子ども」、「対話を通して考えを深めることができる子ども」、「多角的な見方・考え方ができる子ども」として研究に取り組んでいる。5年前に、研究主題を「子どもたちが主体的で対話的に追究する指導法の工夫」として、社会科・生活科に取り組んできた。児童が興味関心をもって取り組もうとしたり、指導者が提示する資料を工夫したりすることはできたが、興味関心からより深い学びへとつなげていくことに課題が残った。学習指導要領に、見方・考え方を働かせることが、深い学びの鍵になると示されている。そこで、本年度は、研究主題を「見方・考え方を働かせて進んで取り組もうとする児童の育成」として、研究を進めてきた。

2. 研究の趣旨

本校の児童は、興味関心をもったことを進んで調べることは好きだが、調べたことを発表したり、交流したことさらに自分の考えをもったりすることができる児童が限られていた。また、自分事として感じられない内容については、自分から進んで取り組もうとする児童の姿が少なかった。学習内容によっては、難しいこともあるが、指導者の工夫によっては、自分事として捉え、興味関心をもって、進んで取り組むことができるのではないかと考えた。そこで、子どもたちが、より身近に感じられるような教材で、しかも様々な角度から自分の考えをもって、交流できるような教科として社会科・生活科に取り組んだ。社会科・生活科は、身の回りの事象を扱い、自分の気づきや問いがもちやすく、多様な見方や考え方を働かせることができる教科でもある。社会科・生活科の時間においては、交流するために一人ひとりが思考したことを視覚化することで、どの児童も進んで発表したり、発表したことから考えを深めることができる時間を確保したりする取り組みを進めている。

3. 研究の概要

研究主題にせまるために、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 社会的な見方・考え方を働かせた問い

- 学習問題づくりで、児童にもたせたい疑問や視点を明確にした資料を提示する。
- 具体的な資料を提示して、事実を問うたり、既知についての話を問うたりする。
- 調べた社会的事象から、特色や意味、相互の関連を多角的に考える問いをつくる。

視点② 思考をうながして理解を深める指導法

- 思考ツールの活用。
- 思考したり交流したりする場の工夫。
- 思考したことを一目見て分かるような板書の工夫。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 予め、児童に考えさせたいことやもたせたい「問い」を考えて、資料や話題を工夫したり、問いづくりの手掛かりになる「問いカード」などを準備して提示したりすることで、問いづくりができる児童が多く見られるようになった。
- 振り返りの場面で、さらに「どうして」、「なぜ」という問いをもち、次時への学習活動への意欲をもつ児童が多く見られるようになった。
- 思考ツールを活用することができた。児童一人ひとりが思考したことを整理して、整理したことをもとにペアやグループ交流を行い、以前よりも多くの児童が自信をもって、積極的に交流する様子が見られた。
- 児童が考えたことを、視覚化することができた。視覚化することで、全体での交流をスムーズに行うことができた。

(2) 今後の課題

- 価値判断へとつながる「問い」づくりや問いかけが十分でなかった。そのためには、指導者が何を価値判断させたいのか、そして、何を調べて考えさせるのかをより意識して取り組むようにすることが大切である。
- 適切な思考ツールを活用することが十分でなかった。それぞれの学習で、何をどのようにして思考するのかによって、使用するツールは違ってくるので、指導者はその特徴をつかみ、その上で児童の発達段階や学習内容に応じたものを取り入れるよう研究を重ねていくことが必要である。